東南アジア

一　現　状

「東南アジア課程は、一九九二年四月、インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科の統合改組により誕生した東南アジア語学科を母体に、一九九五年四月発足した広域組織です。本課程は、わが国との関係が益々緊密でその重要性が増している東南アジア全域を教育・研究の対象としていますが、専攻語としては、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ビルマ（＝ミャンマー）の八カ国の主要言語が置かれています。これらの語学教育を基礎に、その地域の言語・文化・歴史・社会・経済などの諸分野の多角的かつ総合的理解を通じて、その深く幅広い学識と良識ある言動で、将来東南アジア地域に関わってゆく優れた人材を養成することを目指しています」（『東京外国語大学　大学案内』一九九八年）。

これが現在のわれわれが属する東南アジア課程である。入学定員は、インドネシア語専攻二〇名、マレーシア語専攻一五名、フィリピン語専攻一五名、タイ語専攻二〇名、ラオス語専攻一〇名、ベトナム語専攻一五名、カンボジア語専攻一〇名、ビルマ語専攻一五名。計一二〇名。

前述の入学定員は、いわゆる十八歳人口の急増に合わせて実施されている臨時増募二〇名を含んだもので、一九九

九年度に計画されている臨増分返還後は、臨増以前の定員一〇〇名に戻される。

現在在籍する学生数は、インドネシア語専攻九七（七六）名、マレーシア語専攻七一（四八）名、フィリピン語専攻六四（四三）名、タイ語専攻一〇七（八四）名、ラオス語専攻三六（二〇）名、ベトナム語専攻八五（五四）名、カンボジア語専攻三三（二五）名、ビルマ語専攻七二（五〇）名である。東南アジア課程全体で、五六五（四〇〇）名、（　）内は内数で女子。全体の七割強である。かつて四百、五百と言えば、一学年全体の数だったと記憶している古い卒業生もいるだろう。専攻語の数といい、学生数といい、現在の東南アジア課程の発展のほどが理解できるかと思う。

東南アジア課程の八つの専攻語について言うと、東南アジア地域には、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ビルマの他に、シンガポールとブルネイという二つの国が存在しているが、両国ともマレー語を国語としており、東南アジア課程の八つの専攻語は、この地域の国語をすべて網羅したかたちである。

とはいえ、このような研究・教育対象の拡大に見合う研究・教育スタッフの充実という点になると、まだまだこれからいっそう充実させなければならない課題を抱えているというのも、わが東南アジア課程の現状である。

すなわち、三大講座制を採る現在、各専攻語毎に、言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座に属する専任教官が揃っているのが当然であろうが、目下のところ東南アジア課程の八つの専攻語すべてがこの条件を満たし得ているわけではない。またこれまでの努力にかかわらず専任の外国人教師採用の枠を獲得できていない専攻語が残っている。この二つはわが東南アジア課程の今後に残された大きな課題である。

三大講座制のもと、職員録も講座別に編成されているが、ここでは専攻語別に専任教官及び外国人教師を紹介する

ことにする。

インドネシア語専攻　佐々木重次（インドネシア語学、教授）、佐藤弘幸（オランダ経済史、教授）、石井和子（ジャワ学、教授）、イムラン・T・アブドゥラ（インドネシア文学、客員教授）。

マレーシア語専攻　小野沢純（マレーシア経済、教授）、正保勇（マレーシア語学、教授）、アンワル・リドゥワン（マレーシア文学、客員教授）。

フィリピン語専攻　山下美知子（フィリピン語学、講師）、小川英文（東南アジア考古学、助教授）。

タイ語専攻　三谷恭之（東南アジア言語学、教授）、宇戸清治（タイ文学、助教授）小泉順子（タイ社会経済史、助教授）、ウィチャイ・ピアンヌコチョン（タイ語学、客員教授）。

ラオス語専攻　鈴木（旧姓上田）玲子（ラオス語学、講師）、ウティン・ブンニャウォン（ラオス文学、助教授）。

ベトナム語専攻　宇根祥夫（ベトナム語学、教授）、川口健一（ベトナム文学、助教授）、今井昭夫（ベトナム思想史、助教授）、ラム・ホン・フォン（ベトナム語学、客員教授）。

カンボジア語専攻　上田広美（カンボジア語学、講師）、岡田知子（カンボジア文学、講師）。

ビルマ語専攻　奥平龍二（ビルマ史・法制史、上座仏教国家論、教授）、斎藤照子（社会経済史、ビルマ地域研究、教授）、ドー・キン・メイ・ヌェ（ビルマ文学、客員教授）。

以上の専任・客員の教官、計二四名に加えて、東南アジア課程の授業編成に一九九八年現在、出講する非常勤講師は六二名を数える。